

ご挨拶

地方創生担当
内閣府 特命担当大臣
石破茂氏



地方創生担当大臣の石破でございます。このような機会をいただき、まことにありがとうございます。「国際シンポジウム 地方創生に求められるもの 地域と世界を結ぶ」の開催にあたりまして、ご尽力いただいた皆様方に心から敬意を表する次第であります。

世界全体もそうだと思いますが、この国は今、後世から見れば、あの時が歴史の転換点だったという時期に差し掛かっていると思っております。今まで日本の国は、敗戦以来、営々と国民も努力し、GDP世界第2位、今は3位であります。そのような物質的な繁栄は達成いたしました。冷戦の存在、人口の増加、経済の成長、土地の値段の上昇、この4つの前提条件の下、我が国は今日まで国家を運営してきたし、それなりの繁栄を手に入れたのだと思っております。しかし2015年の今、考えてみますとこの4つは全て崩壊したと言っても過言ではありません。

人口はこれから大変な減少局面に入ります。今のままの出生率と死亡率が続いたという前提で、あと200年経つと日本人は1,391万人になる。約10分の1ですね。300年経つと日本人は423万人になる。西暦2900年になると、日本人は4,000人になり、西暦3000年になると日本人は1,000人になり、やがてこの国はなくなる。単純な計算をするとそのようなことに相成ります。これをもってサステイナブルと言うか、と云えばそうではありません。

地方創生の試みというのは、日本全国にありません1718市町村、そこにおいてどうやったら地域はサステイナブルであるか、持続可能性を維持できるかということ、その地域、地域でお考えいただき、それに対して国として、財政面、情報面、あるいは人材面で支援をしていくというのが、今回の地方創生の試みであります。

私が高校生のころ、昭和49年頃であります。田中角栄さんの「列島改造論」というのがありました。私が学校を出て勤め人の頃、大平正芳さんの「田園都市国家構想」というのがありました。これが昭和55年頃の話です。私がこの仕事に入った30年くらい前に竹下登さんの「ふるさと創生」というのがありました。それぞれの取り組みは、地域をどうするかという試みとして、それなりに大きな意義があったものと存じますが、今回の地方創生の取り組みのような、これに失敗すると国が潰れるという危機感はなかったと思っております。

この3つとも、経済がまだ成長していた時代、もしくはバブル経済の時代でありました。人口も増えていました。土地の値段も上がっていました。繰り返しますが、その前提が全て崩れた今どうするかということは、まず地域、地域でお考えをいただかねばならないことであります。そこにおいてサステイナビリティということを考えたときに、自然との共生というものをどう考えていくのか。今まで、ともしれば対立、つまり、人間の利益は自然系の不利益の

ようなところがないではなかった。コウノトリにしても、ツルにしても、いろいろな鳥は、それは綺麗だし、それなりに素晴らしいものだけれど、どちらかというところと農作物を食べて我々の生活にとって良くない存在ではないかという考え方もなかったわけではない。どうやってそれを対立の構造から共生の方向にもっていくかということは、地域、地域でいろいろなお知恵があり、いろいろな取り組みがあり、そういうようなお話が今日あろうかと思っております。

私が敬愛している方の一人に、藻谷浩介さんという方がいます。「里山資本主義」という本をお読みになった方も多かろうかと存じます。この本は主に、中国山地の中山間地域の、持続可能性がないと言われていた場所に題材を得ており、本当に詳細な取材に基づいて書かれた、素晴らしい本だと私は思っております。

人間の幸せとは何だろうか、サステナブルというのはどういうことなのだろうか、それはそういった地域にこそあるのではないか。里山資本主義というのは、あまり人口に膾炙しにくいのかもかもしれませんが、まさしく里山こそが資本ではないか。今さえよければいいとか、自分だけ儲ければいいとか、そういう考えを株主資本主義とか金融資本主義とか申しますが、本質はゼロサムゲームで、誰かが得をして、後の人はみな損をするというのが金融資本主義であって、決してサステナブルではありません。里山にこそ、地域にこそ、そういうものがあるのであって、そういうのをサブシステムとして、この国は内蔵していかないと将来はないというような論旨ではなかったかと私は記憶をいたしているところでございます。

岡山県に真庭市というところがあって、ペレットストーブとかバイオマスとか、そういうことで全国の注目を集めているところですが、その例にみられるように、その地域が地域の資源を最大限活用し全体としてどのようにしてまわしていくのかということが重要でございます。それはずっと時代を遡って、

江戸時代の暮らしへ戻れということではなくて、現代における持続可能性のある、そしてまた自然と共生できる、そういうような国家というものを我が国はつくっていかなければなりません。

少子化問題も、財政問題も、環境問題、エネルギー問題も、日本が課題先進国であるが故に、それを真っ先に解決することは、今の日本国に生きる我々が果たすべき、次の時代に対する、国際社会に対する責任である、私はかように思うところであります。

政府があまり偉そうなことを申し上げる立場にはございません。まさしく知恵は地域にある、私どもはそれに学び、いかにしてそれを国政に反映するか。地方が主役とかという言葉は、美辞麗句のように今まで語られてきましたが、まさしく今、地方が主役であり、それをどうやっていかし後世に伝え、世界に伝えるか。そういうような時代であると認識しています。有意義な会となりますことを心からお祈りして、ご挨拶といたします。

ありがとうございました。